神奈川大学　産学連携事業「本の架け橋プロジェクト」　御中

お礼とご報告

２０１６年７月から２年間、シニアボランティアとしてモザンビークに派遣されています、[redacted]と申します。首都、マプトにあるセント・トーマス大学というところで、コンピュータサイエンスを教えています。楽しみに待ちわびていた絵本が、無事に届きました。ありがとうございます。

モザンビークの国語はポルトガル語です。ポルトガルから独立したのが１９７５年。その後内戦が続き、それがおさまってから２０年ほどたったところですが、国内の教育体制は今だ整っていません。世界の最貧国のひとつに数えられています。識字率は２００８年の報告で５４％。国語のポルトガル語がきちんとできるのは、全国民の２０％ほどではないか、と言われています。国内には地域ごとに異なる現地語があり、国語としてのポルトガル語教育は十分とは言えないようです。国語教育とは何なのか、について考えさせられるとともに、その重要性を感じる毎日です。教育の基盤である言語教育がしっかりしていないところで、コンピュータサイエンスのような専門教育を行う難しさを、今感じています。これは、ここに来る前に十分予想していた難しさです。

日本で行われている絵本の読み聞かせ活動が、モザンビークでも有効なのでは、と思い、昨年７月の出発前に、近所の図書館で行われていた、絵本の読み聞かせボランティアのためのセミナーに出たりしました。日本にはとてもいい絵本がたくさんあります。それをポルトガル語に訳して、現地語も交えながら、小学校を回って読み聞かせをやってみたい、と思いました。日本という遠い国の異なる文化を背景にしたお話を聞くと、そこに、それとは違う自分たちの世界が映るはずです。それを感じてほしい、その違いに価値があるのだと感じてほしい、その違いを意識して、言語を身につけてほしい。私のその願いを、日本の絵本が媒介してくれるかもしれないと思いました。モザンビークの基礎教育に少しでも寄与できれば、やがてそれが大学での専門教育の可能性につながることを信じたいと思います。

こちらに来て、日本文化に興味のあるイタリア人の[redacted]先生と知り合いました。彼女は大学でイタリア語を教えていますが、できれば、日本語のコースも設けたいと言うので、それなら、私が日本語を教えましょう、と言ったらとても喜んでくれて、さっそく日本語クラブを立ち上げてくれました。私は日本で長いことエンジニアをしていましたが、いつか海外で日本語教師をやろうと思って独学していました。ＪＩＣＡのボランティア活動をする前、オーストラリアで教員資格を取って、６年程、オーストラリアの中学高校で日本語を教えていたのです。

ロゼッタ先生の呼びかけで集まった学生達と、絵本の読み聞かせ活動ができるかもしれないと思い、クラブ活動を始めるにあたって、学生達に、ひとつの目標として、いっしょに日本の絵本を読もう、と話したところ、みんなとても興味を持ってくれました。

市内の、他のＪＩＣＡボランティアが入っている小学校に行って、読み聞かせをやってみまし

た。絵本を読むよ、と言ったらざわついていた子供たちが急に静かになりました。みんな絵本の前に集まって、きらきらした目でじっと見ていました。最初、日本語で読むからね、と言って読み始めました。子ども達はもちろん、日本語はさっぱりわからないのですが、静かに聞いてくれました。わかった？と聞いたらみんな首をふっていましたが、何かを感じた子もいたようでした。じゃ、今度は英語で読むよ、と言って読み始めました。英語は学校で教わっているので、ちょっとわかるのです。わかった？ときいたら、うん、ちょっとだけ、という返事。言葉がぜんぜんわからなくても、絵と声の調子で、何かが伝わるのを感じました。次にポルトガル語と、少しだけシャンガナという現地語を交えて、読みました。私がシャンガナをしゃべると、みんなワッと声をあげました。そのシャンガナは通じたようでした。わかった？と聞くと、みんなうんうんとうなずきました。じゃ、だれか、このポルトガル語を読めるかな、と言ってみたら、一人の男の子が手をあげました。その子に読ませて、私は本のページをめくりました。彼は5年生くらいかな。ところどころ間違えたりひっかかったりしながら、一生懸命読んでくれました。

この時の絵本は、私が日本から持参したものでしたが、この子達にもっとたくさんの絵本を読んで聞かせたいなあ、と思いました。　　先生や学生達が、小学校を回って日本の絵本の読み聞かせをやってくれたら、どんなにいいだろう、と思い、「世界の笑顔のために」プログラムで絵本の寄付をお願いしました。

中学校で英語を教えている　　先生が、モザンビークでの私のポルトガル語の先生です。彼は、子供たちのポルトガル語が現地語の影響を受けて、どう間違っているか、現地語が彼ら自身の間で如何に軽視されているか、を話してくれました。現地語はもっと重要視されなければならない、と彼は言いました。私もそう思うので、その話で盛り上がりました。絵本を翻訳しながら、彼はシャンガナをちょっと教えてくれました。実は彼は北の地方の出身なので、南のこのあたりのシャンガナ語は彼の言葉ではないのです。でも、それを自分で勉強して、この地方出身の人達より、自分の方がシャンガナがよくできるんだ、と自慢してました。

送っていただいた絵本の中の「ししときつね」というお話を、さっそく、ポルトガル語とシャンガナに翻訳しました。そして、中学校で読み聞かせをやってみました。このお話では、日本の獅子舞の獅子頭を、キツネがインドから運んできた、ということになっているので、読み終わってから獅子舞のビデオを見せました。獅子に頭をくわえてもらうと縁起がいい、という説明をして、お祭りで人々が獅子の口に頭を突っ込んでいるところのビデオも見せました。絵本のお話は中学生には子供っぽすぎたかもしれませんが、獅子舞のビデオには、すごく興味を持ったみたいでした。

↑　　先生

↑　他のボランティアと二人で「ししときつね」の読み聞かせをしているところ

↑　読み終わって獅子舞のビデオを見せているところ

先生と４年生の。は、日本に留学して日本のことをいっぱい勉強して、それをモザンビークで学生達に教えたいそうです。

小学校にポルトガル語の授業を見学に行きました。一クラス９０人以上です。学校の数が足りないのはもちろん、先生も足りないのです。でも、子供たちは元気いっぱい。

学校は３部制、つまり、朝、昼、夜と生徒が入れ替わります。平日は授業がつまっていて、読み聞かせをする時間がなかなか取れません。可能性があるのは土曜日の午前中です。最近は土曜日に補講をする先生もいるようです。土曜日にクラブ活動をしているボランティアもいるので、そ

こで読み聞かせをさせてもらうのが、今のところ一番やりやすいやり方です。絵本の翻訳が進んだら、どういう形で読み聞かせをしていくか、[redacted]先生や[redacted]と相談していきたいと思っています。この活動の報告は、随時、以下のサイトにアップしていきます。

http://www.city.dazaifu.lg.jp/admin/soshiki/somu/4/1/1/7877.html

お礼のビデオを作製しました。同封のＣＤ－Ｒを見て下さい。また、Youtube にも上げています
https://youtu.be/SEM3_9zWX8I

＜報告者＞　平成２８年度１次隊　シニアボランティア　コンピュータ技術 [redacted]